

第1回アクティブ・ラーニング（以下AL）研修会実施報告

日 時 平成28年7月29日（金）
場 所 多治見高校 会議室
参加者 本校職員32名 大垣南高校3名
講 師 広島県立祇園北高等学校 校長 柘磨昭孝 先生
テーマ ICEモデルを軸としたアクティブラーニングの
導入と実践



実施内容

アクティブラーニングを導入する上で、目標と導入後の評価について考える必要がある。柘磨先生は以下のように説明された。

アクティブ・ラーニングにおける目標の設定

- ① 生徒が自ら問いを立てること
- ② 生徒の自己内対話と協働の促進をすること
- ③ 省察より、学習の価値付けをすること

生徒に解ありきの問題に立ち向かわすだけではなく、あらゆる意見や方策のある問題に対してもたくましい力をつけたいことが要諦である。そのためには、教師がすぐに答えを教える、早くやる方法を伝えるのではなく、生徒自身が正誤を決めるだけではなく、じっくり考えることで成長する場を提供しなければならない。



そこで、アクティブラーニング型の授業は一種の手段であり、授業全体をどうデザインしていくか、どう組み立てていけばよいか。その基準として3つの段階に分別される。

- | | |
|--------------------|-------------------|
| ① Ideas フェーズ | 道具を習得する学び |
| ② Connections フェーズ | 道具を適用する学び |
| ③ Extensions フェーズ | 道具を活用して作り出す、高める学び |

この3段階のどこまで生徒が到達しているかを確かめることで、教師は知識吸収型の授業から自己で創造性を養う授業へと変えていくことができる。そのためには、目標の設定方法、発問の構成、授業の展開など実際に具体例を示しながら、職員は今一度、授業について振り

返る機会となった。また、同時にアクティブラーニングをどのような場面で用いればよいか、従来の授業とどのようにバランスをとればよいか、アイデアをいただいた。

実際、「民主主義とは」というテーマで、実際職員はアクティブラーニング型の授業を体験した。ここでは、あらかじめ教科、性別、年齢構成がばらばらでグループを構成し、職員同士で言葉の意味をどう解釈するか、どう説明するかなどを話し合った。さらに、「民主主義が崩壊したとき、それ以外のシステムを考えよ」といった答えのない問題に対しても、様々な意見がみられ、それをグループ間で発表するなど、生徒の気持ちに立ち、それをスムーズに進行していくには教師側がどのようなプロセスが必要かなど考える機会となった。



各グループ内で考える様子



代表者が発表する場面

このように、職員が講師の先生の話聞くだけに終わる研修ではなく、これこそアクティブラーニング型の研修へと変わりつつある。本校では、このような研修を自分たちで学んでいく試行錯誤型、発見型の授業を増やしていくとともに、思考プロセスを重視することより深い学びへと変えていきたい。